

大和路に初夏の里山の風情を求めて

大神神社・聖林寺・長谷寺を 巡るホタル狩りバスツアー

日時: **2009年6月27日(土)**

行程: **JR 大阪駅→大神神社(正式参拝と大直禰子神社見学)→今西酒造見学(今西社長から純米吟醸酒「露葉風」の紹介)→池利三輪素麺茶屋「千寿亭」(池利(株)池田専務からの素麺のお話とあすか会席の昼食)→聖林寺(国宝の十一面観音参拝1)→長谷寺(国宝の本堂・紫陽花)→長谷路(版画土蔵館・柿の葉寿司と山菜そばの夕食)→ホタルの夕べ(山野草の里づくりの会主催)→JR 大阪駅**

ホタルを求めて桜井市の山野草の里づくりの棚田へ

ホタルに会いたい…。十年ほど前に、秋田の男鹿でであった星になったホタルの光……。『なまはげ来す!』という劇の脚本を私が初めて書いてワッハ上方の舞台で上演することになり、まずは取材を兼ねて真山神社なまはげ伝承会の方々を訪ねた。初めて秋田の地に降り立ち、県庁の観光課を訪ね遅い昼食に稲庭うどんを食べて、ひらすら車で北上した。夕刻、男鹿半島の山懐にある真山神社に移築された江戸時代の民家でなまはげ神事を体験し、伝承会の方々と囲炉裏端できりたんぽ鍋を囲みながら団欒しているうちにとっぷりと夜の闇に包まれた。ホタルがいるよと声をかけていただいて表に出て小川のせせらぎに目をこらしているばかりの私に、青年団の一人が素早くホタルを両手で包んで捕まえ、そっと私の手のひらにのせてくれた。手の中で輝いている愛おしい小さいが確かに輝く命の美しさに暫く見入っていた。やがてその小さな光がゆっくりと中指を上りはじめ、指先から翼を広げて天に向かって飛び立った。そして、その輝きを追っていくと、そこには息をのむような満点の星空、天の川の砂粒さえも数えられるほどの無数の星々の輝き。ホタルが輝きながら天空を飾る星になり、私は感動のあまり呆然と星空を眺めていた。

「ホタルが見たいなあ…」とつぶやいていると、塾生で造園業を営む池崎宗男さんが地元の花のボランティアのグループでホタルを見に行ったという話を耳にした。そこで5月に奥様とドライブがてらに長谷寺近くの大和川源流へ下見にいった。そこは、NPO 山野草の会が再生に取り組んだ里山だった。立役者は、福岡定晃氏で桜井市役所を退職し改めて地元を見渡すと、高齢化によって人の手が入らず荒廃した山河が広がっていた。次の世代の子供たちの為に立ちあがり、大和川の環境保全と里山再生に取り組む整備を進めている間に、棚田や水路にホタルが戻ってきたそうだ。まずは現地視察ということで、その里山を見学した。作業家屋の周囲に広がる一

周 30 分ほどで散策できる里山は、以前は人の手が入らないため雑木や雑草が生い茂っていたそうだが“トトロ”が現れそうな棚田や水路が広がっていた。かつての里山が再現され、今では地元の幼稚園児や子供たちがビオトープ観察にやってきては、野に咲く花に直面したり、歓声をあげながらトンボや蝶を追いかけ、池の中の幼虫たちや大きな蜘蛛の巣に驚きながらも様々な命が支えあって様々な命が生きてい自然の仕組みを目で確かめ体で受けとめて思い出として心に刻んでいく…。子供たちの目の輝きや笑顔と出会うために、体力的には楽ではない農作業にも余念がないそうだ。そして、年に一度、ホタルの夕べというイベントを主催して子供は勿論一般の人にも開放していて、池崎さんはその催しに参加し、ホタルと出会ったという。

下見の帰り道に、平城京跡での「遷都祭」のプレイベントに出展されている福岡さんを訪ね、6月27日のホタルの夕べに伺う約束をした。

しかし、ホタルが姿を現してくれるのは夜8時頃。それまでの時間をどう過ごそうかと、考えていたところに、桜井市を通るたびに大きな鳥居を気にしながら拝する機会がなかった大神神社と、昼食には三輪素麺に、国宝の十一面観音様にもお会いしたかったし、せっかく近くまで行くのだからと「長谷寺」にも参拝し、門前の江戸時代の造り酒屋の建物を今に伝え重要文化財に指定されている「長谷路」で柿の葉寿司と御蕎麦の夕食を……。ということで、正に朝から晩まで遊び回るという桜井市の魅力を堪能する蛭狩りツアーとなった。今年は長雨が続き、天候を気にしながらもその日の朝を迎えた。

我が国最古の神社・大神神社で正式参拝

天候は曇り、一週間前は雨の予報だったが、どうにか雨雲からは逃げられそうだ。ただし蒸し暑い。

バスは八尾・天王寺・大阪駅と参加者を拾い集め、8時半過ぎ一路奈良に向かって西名阪自動車道を走る。当日の行程説明と自己紹介後配ったのが、紀州産を中心に国産梅のみを100%使用し、しっかりとした梅酒の味わいを残しながらさらりとした飲み口が特徴のストレートタイプの梅酒・「**さ**らりとした梅酒」(微炭酸缶)で小売価格168円。

これはチョーヤ梅酒の金銅社長からの差し入れて、冷たく冷やした缶を受け取って、「モーニング梅酒だね」とさっそく一気飲みする参加者もあった。

天理インターを降りしばらく走ると、昭和59年10月13日に昭和天皇のご参拝と在位60年記念に高さ32.2m、耐久性1300年という一際巨大な大鳥居が目につくと間もなく二の鳥居の前の駐車場へ到着。

ここで下車し桜井市ボランティアガイドの木口美津枝さんと合流し、砂利石を踏みしめながら進むと目の前に、重要文化財のどっしりとした拝殿の姿があった。

まずは、10時の正式参拝の予約に間に合うように駆け込むと、勅使殿に通され、蓋つきの湯呑茶碗に出されたお茶と祈祷する人だけに与えられる三つの葉型の其々



に「神社」と浮き出された上品な甘さの紅白の干菓子が出された。「ご代表の方は」と問われ、今回ホテルに会いに行こうと提案いただいた池崎さんが装袋をつけて準備いただいた。



正式参拝者を代表して塾生の池崎宗男氏

お茶をいただいている間に、神社の方より大神神社についての説明があった。三輪山は奈良盆地をめぐる青垣山の中でもひときわ形の整った円錐形の山で、神の鎮まるお山として、『古事記』や『日本書紀』には、御諸山（みもろやま）、美和山（みわやま）、三諸岳（みもろのおか）と記されている。高さ467メートル、周囲16キロメートル、南は初瀬川（はせがわ）、北は巻向川（まきむくがわ）の2つの川によって区切られる面積およそ350ヘクタールが大物主神（おおものぬしのかみ）の鎮まるお山が神体山で、三諸の神奈備（みもろのかむなび）と称されている。本殿は設けず拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し、山内の一木一草に至るまで、神宿るものとして、一切斧（おの）をいれることのないという三輪山を拝するという、原初の神祀りが今日まで伝えられている我が国最古の神社であることや、国造りの神様として、また医薬・酒造・方除等人間生活全般の守護神として、大和一ノ宮・三輪明神として延喜式内社・二十二社・官幣大社として重んじられているようだ。

拝殿への案内があり、水で手を清め、白紙で手を拭いて皆神妙な顔つきになった。拝殿は中央が少し低くなっており向かい合う格好で神職と対峙して全員が座に着くと、正式参拝がはじまり、祝詞やお祓いに、途中巫女さんより低頭する頭上で鈴の音でお祓いをしていただいたが、その音色がなんとも清らかで雑念を祓い落とすようであった。最後に代表して池崎さんが中央の少し低くなった所より拝殿と禁足地（神体山のうち特に神聖な場所）とを区切る三ツ鳥居（三輪鳥居）に向けて玉串を献上し正式参拝は終了。

向いあった神職からの今の拝殿は4代将軍徳川家綱の寄進により寛文4年(1664年)に造営されたもので、内部正面の両側には神饌物を献る御棚が設けられ、両手に渡り廊下があり、右手の御殿を勅使殿といい昔宮中から勅使がみえた場合に休憩され、向って左側の御殿は、勤番所で共に県の文化財となっている。勤番所の東、拝殿の北側にあるのが神饌所で神前におそなえする神饌一切の調理を行う場所となっていると丁寧に説明いただいた。

お神酒をいただき、横の廊下の端まで歩み寄ると、大きな鳥居を真ん中にまるで左右のやや小ぶりの鳥居が中央の大きな鳥居と肩を組む



大神神社の参拝記念品

ような三ツ鳥居の全貌がやや斜めからではあったが拝見することができた。人が立ち入らない聖なるお山には杉の巨木が根を張り人々の願いに耳を傾けている。各人にお札にパンフレットや杉の御箸に粟菓子にお米に干支の置物の御饌を頂戴した。

拝殿の前には、7月31日に三つの輪を潜ると暑い夏を健康で過ごせるという茅の輪くぐりの神事があるため既に準備されていた竹と藁で組まれた三つの輪があり、足早に三つの輪を潜った。右手には江戸時代には、「雨降杉」といわれ雨乞いの時に人々がお参りしたり、杉の根本に巳（み）さん（＝蛇）が棲んでいるといい伝えらるため「巳の神杉」と称せられるようになった大木には、好物とされる卵がお酒とともに供えられている。その大杉を見上げていると、人間の寿命はどう頑張っても100年位だとしたら、杉は屋久島の縄文杉のように環境に恵まれれば数千年の月日を生きることができるという。大いなる生命力を持つ杉は古来より尊ばれ崇められていたのだろう。

拝殿をバックに記念写真を撮った。



正式参拝後、大神神社拝殿前にて

司馬遼太郎の街道をゆく(1)で大神神社の名称についての記述がある。「三輪明神もしくは三輪神社と言われながら、大神神社と書いてオオミワジンジャと訓(よ)ませる。明治初年に神仏分離がおこなわれたことが、事情の一つである。それより以前、平安時代に神仏混淆(こんこう)思想が完成され、日本の神に仏教的な名称をつけた。明神というのは諸説はあるが、仏教語である。明治は日本固有の神から仏教臭を消してしまう大運動であった。そのため権現や明神の呼称は廃され、あらためて日本らしい神名もしくは神社名をつけねばならなかった。明治初期、社名を政府にとどけ出るにあたって、大神神社と書き、オオミワと読ませることをやってしまったに相違ない。」

大神神社: 奈良県桜井市三輪

TEL: 0744-42-6633

明治以前は神仏習合の三輪のお山の神様と仏様

拝殿では梢を渡る風に癒されすっかりゆっくりしてしまった。が、食に拘る熟塾としては、三輪に来たなら三輪素麺でしょう！ということで、食事時間が気になるが、午後からの十一面観音様を拝する前に、どうしても立ち寄っておきたい場所があった。若宮社で弘安8年(1285)に西大寺の思円上人が建てた本堂がそのまま本殿

とされ、神仏習合の江戸時代には五重塔を備える「大御輪寺」として信仰をあつめ、聖林寺に安置されている十一面観音が納められていた。

二の鳥居の傍の若宮社に走りこむ。確かに神社ならざる大屋根は寺院の風格。廃仏毀釈の波を受けて十一面観音像が道端に打ち捨てられていたという風説もあるようだが、神社の方の話だと、粗末に扱われなかったからこそ後背などの飾りを失ってはいるが仏像そのものは国宝に指定されるほど損傷はなく、五体満足であるばかりか指先さえも欠けてはいない。きっと廃仏毀釈という時代の波とはいえ、長年信仰していた仏様が粗末には扱えないと心ある人々によって聖林寺に移したに違いないと言われた。

確かに滋賀県の渡岸寺の国宝の十一面観音も戦火を免れるために村人によって地中に埋められたというが、金箔は剥がれても指先一つ失ってはいない。きっと大切に扱われと連想すれば、聖林寺の十一面観音のお姿も整っていた。時々手足や首を失くした仏像が展示されていることがあるが、いくら衣の裾が優美だとはいわれても、見る者にどこか心痛い思いが響くのはその仏像がどのように扱われたであろうと思ひ至る為だろう。二の鳥居から早足駆け込んで記念写真を撮り、今西酒造を目指す。



呑院の面影を残す大直禰子神社(若宮)

山野草の里で育った酒米で醸造された露葉風

一の鳥居近の小道を行くと、古い通りにでる。お酒の神様のおひざ元の三輪で今では唯一の酒蔵として生き残り、積極的にお酒造りに取り組んでいる今西酒造の店舗



今西酒造の今西 謹代表取締役

と作業があった。山野草の里代表の福岡さんに何かお土産になるものはないかとたずねると、山野草の里山の棚田で大和伝承の好適米「露葉風」を

栽培して西酒造さんに納めて、『こく』が有るのに『切れ』が有る純米酒「露葉風」に仕上がって販売されているとお聞きした。大和川の源流でホテルが飛び交う棚田でとれたお米なら農薬も使わず体にもよく美味しいだろういううえに、当日は山野草の里の会員価格で少し安く分けてもらえるというのなら尚更立ち寄ろうということになった。

寛保3年(1743年)創業の今西酒造、260年の歴史を刻む建物は古い酒屋の趣があり、今西社長自らが蔵の中をご案内いただき、一般に普及している酒米山田錦よりも丈の短い露葉風の稲をバックに説明を受け、酒蔵や室なども見学させていただいた。

見学後に、「露葉風」や、室町時代に奈良・菩提山正暦寺において創醸された酒造法で醸造された三諸杉純米「菩提もと」なども試飲。手作りと地元の酒米に拘った銘酒はそれぞれに個性のある飲み口。ここでは買い物ツアーとばかりお気に入りのお酒や奈良漬を買い求め、お酒の神様・大神神社から賜った大きな杉玉を飾った店先で今西社長を囲んで記念写真を撮った。



今西酒造の銘酒を試飲



今西酒造の今西社長を囲んで

今西酒造:奈良県桜井市大字三輪510番地

TEL: 0744-42-6022

三輪素麺について学んで食した池利の千寿亭

お昼前になっていた。バスを近くまで回してもらって乗り込む。

三輪素麺が待っている!!バスで5分足らず、池利本社前にある千寿亭にたどり着いた。そこで迎えてくださったのは、池利の池田専務。すでに各テーブルに用意いただいた「あすか会席」を食べながら、三輪素麺の歴史についてお話を拝聴することになった。

三輪素麺は今を去る千二百有余年前、大神神社宮司従五位上大神朝狭井久佐

(おおみわのあそんさいくさ)の次男、穀主(たねぬし)が三輪の里の土地と三輪山から流れ出る清流が最も小麦の栽培に適するのを知って種を蒔かせ、人々を飢えから救うため小麦粉を原料に「素麺」を製造したのが始まりと言われている。奈良時代から平安時代までは、従来の素麺の原形「索餅(さ



くへい)」と呼ばれる小麦粉をこね縄状の麺を二つ折りにしてよじったものを食していた。

鎌倉時代になって中国から禅宗とともに、油をつけて延ばす技や、挽き臼が入ってきたことで製粉技術が進み細く長くすることが出来るようになった。それを中国語で素麺（スーミェヌ：素は精進物の意）と呼んでいたのがこれが訛って今私たちが食べている「ソーメン」と呼ばれるようになった。原形の「索餅（索麺）」にかわって書物に「素麺」の文字が出てくるのは、南北朝時代の「異制定訓往来（いせいいていきんおうらい）」からで、



三輪素麺について熱弁をふるう池田の池田利秀専務

江戸時代に入ると、素麺は広く庶民の口に入るようになり、お伊勢参りによって宿場町として栄えた「三輪」で食べた三輪素麺の声価が諸国へ宣伝され、素麺の製造技術を習いにやってくる者も多く全国に素麺作りが広まったと、縄を手にもわたりやすくお話いただいた。

三輪素麺の価格は、毎年2月5日大神神社でその年のそうめんの高値・低値を決める卜定（ぼくじょう）祭が執り行われ、新しい値段がご神意により決められ、ここで決まったそうめんの値段は三輪そうめんだけでなく日本全国のそうめん相場に影響があると言われている。ちなみに、今年は安値だったそうで、大神様も買い手の庶民の懐具合に合わせてくださったのだろうか…。

質問コーナーでは池田さんなのに、池田さんとはこれ如何に？という質問が出たが、これにこたえて曰く。創



千寿亭前で、池田の池田利秀専務を囲んで

業は西暦1850年（嘉永三年）から初代が三輪で素麺造りを始めた。明治以降に池田の姓を名乗り素麺の製造販売を、二代目が荷車を引いて県外にも売りに歩き、大正末期に三代目になって大阪の三越で百貨店との初めて取引が始まった。当時の販売方法として素麺が折れないようにとセロファンに包んで売ったのが画期的な出来事だったらしくそれが今の素麺の包装形態となり、飛ぶように売れたと聞いている。

特に、面倒見のいい三代目の池田利三郎のことを村では通称で池田さんと呼ばれるようになり、五代目社長の父は池田利一、専務の私は池田利秀で、息子にも利をつけた名前を付けているとのこと。

質疑応答の内に、昼食を食べ終えて、「流石、茹で具合もいいし、久々に美味しい素麺を食べた！」の感想に、この麺は熟練した職人が手延べで伸ばしたものを1年寝かせた池利で人気ナンバーワンの「**山辺の道**」とのこと。確かにこしと旨みがあり、全員完食！

千寿亭の前で池田専務と記念写真を撮ってお見送り頂いた。**千寿亭：奈良県桜井市芝293**

TEL 0744-45-0626

崇高で品格ある聖林寺の国宝・十一面観音像

国宝の聖林寺に向かう途中で、弘化年間（1844～48）創業の白玉屋榮壽前にバスを止め、大神神社の御神体山三諸（みむろ）山に因んだ大和上街道の宿場街名物の**最中「みむろ」**を車中のおやつに買いもとめた。皮はパリッとしていて、上品な甘さの特産大和納言小豆の餡がたっぷりと詰まって美味！

（株）白玉屋榮壽：奈良県桜井市大字三輪497

TEL：0744-43-3668

バスは国道165号線を談山神社に向かう途中の道を上がり、駐車場に停車。下車して聖林寺への急な坂道を上がっていく。路線バスの便が一時間に一本あるかないかで不便な為か、参拝する人が多くはない。

3年前春先に天気もいいのでふっと、熟塾で滋賀へ国宝の渡岸寺の十一面観音様を拝するバスツアーを実施する前にいつか近くまで行きながら、素通りしてしまった聖林寺の十一面観音像を参拝しようと思った。春先の陽気に誘われて一人でふらっと出かけた。バスを降りて、お寺に向いゆっくりと坂道を歩いていると、足元に小さな花を咲かせている雑草を見つけて立ち止まった。誰の世話にもならないのに立派に咲いている姿に「ああ、なんと健気で可愛い花だ」とこととうっとり見入ってしまった。そして「今日は綺麗な一輪の花を見ることができて幸せだなあ」と心から思えた。今まで足元に咲く一輪の花を見て心からそんなにも感動したことがなかったので、自分でも驚いた。そして、本堂から上がったところにあるコンクリート製の収蔵庫の中で長身の観音様と対面した。次の参拝者と交代しようと座っていたが、梅の花が満開で時折爽やかな春風が開いた戸口から舞い込んでくるばかりで、誰も来ない。国宝の仏像の前で次のバスがくるまでの1時間、たった一人で向かいあっていた。硝子貼りだったが、光の加減で自分の姿が幻のように仏像と重なって見える。紆余曲折の中で、人里遠いこのお堂に納まっていらっしゃる観音様を一人眺めていると、奈良時代より様々な人々をご覧になってきたのであろうとその物語をお聞きしたかった。



だから、今回のバスツアーでも大神神社を参拝し、江戸時代まで安置されていた若宮社に詣で、豊饒としたそのお姿にもう一度お会いしたかった。聖林寺のホームページによると 前住職倉本弘玄氏は十一面観音像について「この像は仏、光、座（仏身209.1cm、光背260.6cm、台座77.8cm）を揃えた木心乾漆造の代

表的なものであり、いわゆる天平様式、八世紀の日本の彫刻を代表する名作である。均整がとれ量感にみちたお姿、優婉な天衣、微妙に変化したお手の表情、華やかな宝相華唐草文の光背、軽快で安定感に富む台座、いずれも創意に満ちている。とりわけ、そのお顔には切れ長の目が正面を正視して永遠を凝視するかにみえる悠遠な表情があり、後の仏像のように伏眼に人を見つめる感がない。いかにも奈良時代の理想像としての仏像のあり方を示すものといえよう。第一回指定の国宝、天平時代を代表する美しい仏像で、大神神社の神宮寺、三輪山・大御輪寺(おおみわでら)の元の本尊。天平神護年間前後、西暦 762 年から 769 年の間に東大寺の造仏所で造像され、その願主は智努王(ちぬのおおきみ・文室真人浄三、天武天皇の孫)とする説が有力。造像の由縁はよく分かっていないが、わが国発祥の地、古代大和王権の中心地に祭られた意義は大きく時の孝謙女帝の何らかの関与があったものと推察できる。

長く三輪の本地仏で秘仏としてまつられてきたが、神仏分離令を受けて、高僧、大心(聖林寺再興七世)によってこの寺に運ばれた。観音はかつて四天王に守られ前立観音があり、左右に多くの仏像が並び立ち(現法隆寺の地蔵菩薩=国宝は左脇侍)背面には薬師如来一万体が描かれた板絵があり荘厳にまつられてきた。現在、奈良国立博物館に寄託している光背は大破しているが、宝相華文をちりばめた見事なものでその復元が望まる。長い年月を経て多くのものを失ったとはいえ、これだけ保存良く伝わったことはそれだけでも稀有なことであろう。」と記されている。

聖林寺の本堂は、高台の庵のような建物でこじんまりとして元禄時代の子安延命地蔵菩薩や、室町時代の如来荒神像が安置されているが、フェロノサも絶賛したという十一面観音像の気品と崇高さは他に比べようがない。そして、窓辺からは卑弥呼のお墓とも言われる箸墓などの古墳群や山辺の道、三輪山の風景は絶景で、古代のロマンへ思いを馳せることができる。

聖林寺のお堂の前で記念写真を撮った。



国宝の十一面観音と対面した聖林寺にて

聖林寺： 奈良県桜井市下 692

TEL： 0744-43-0005

紫陽花の咲く初夏の長谷寺を散策

次に、西国三十三箇所観音霊場の第八番札所で古くから「花の御寺」と称され「枕草子」「源氏物語」「更級日記」

など多くの古典文学にも登場する長谷寺に参拝した。午後からますます蒸し暑くなった。門前の通りを歩き仁王門を潜り、国宝の本堂までの長い回廊を上って行く。春ならば 399 段の回廊ぞいに咲く桜やボタンの花を愛でながら足の疲れも感じないところだが、花のない季節はただ足元ばかりを見て汗だくで一段一段登るばかりで、本堂の大屋根が見えるとやれやれと安堵する。国宝の本堂にたどり着いた時、ちょうど祈祷を受ける団体があったので僧侶の読経の声が堂内に響き線香の煙りが立ちのぼる。その中で見上げる室町時代に再建された 10 メートルもの身の丈を持つ日本最大の木造の重要文化財の十一面観音像のお姿は圧巻だ。観音様は現世利益を司る仏様なのだが、長谷寺の観音像だけが左手に水瓶を持ちながら、普通地蔵菩薩の持つ錫杖を持ち岩の上に立つ姿が特徴で、これは地蔵菩薩と同様に自ら人間界に降り立って人々を助けようとしているお姿だという。本堂の清水寺同様の舞台に立つと、境内を見渡すことができ、遮るもののない天空から快い風が舞い降りてくる。暫くぼんやりと風に吹かれていたが、この立派で巨大な観音像はかつては高貴な方々が詣で、庶民が詣でることができたのは本堂の裏の小さな観音様だということで、覗きからくりのように扉の間から拝した。安信するほどに身の丈にあった観音様だった・・・。本堂近くの「源氏物語」玉鬘(たまかづら)の段に描かれた二本(ふたもと)の杉を眺めて下る途中に紫陽花が咲く坂道があったので、記念写真を撮った。



紫陽花の咲く長谷寺境内にて

長谷寺： 奈良県桜井市初瀬 731-1

TEL： 0744-47-7001

長谷路でたっぷり休憩・版画鑑賞、そして夕食

ホテルのお出ましは、8 時からということで、長谷寺門前の「長谷路」にたどり着いた、ここは山田酒造という江戸時代の造り酒屋の家屋を今に伝え平成 12 年に文化庁登録文化財指定を受けている。2 階の大広間をお借りした。約束の時間よりは早くついた。門を入ると池のある中庭に飛び石がありどこから上がっていいやらと迷っていると、好きなところから上がってくださいとのこと。確かに座敷の窓は開け放たれているので広い縁側のどこからも上がれるが、手前の茶室の隣の部屋の前の大きな庭石の上で靴を脱ぎ、渡り廊下を抜けて二階に続く細い階段を上がる。かつて酒造を営んでいた井戸からは 250 年湧き続ける名水が湧き出ていて、今回は特別に分けていただけるとのことができたが、ボトルをバスに置いてきたので取りにもどることになってしまった。水を

求める人は疲れた足でまた門前町をフラフラと歩き、残りの人たちは冷たい水で喉を潤し茫然自失と二階から庭を眺めたりしながらゆっくりと休憩。30分ほどでボトルを取りに帰ったメンバーも立ち戻り、喫茶時間も終了で全員1階の部屋へ移動。各自の注文通りに、柿の葉寿司付きで熱い蕎麦やら冷たい蕎麦やらと運ばれてくる間に、交代で併設された

「版画土蔵館」を見学した。

そこには、**棟方志功**（5点）や地元出身の**谷中安規**の版画が展示されていた。特に、谷中安規（14点）の作品は、小品ながら幻想的でモダンで怪奇。観ている者の心の奥底を搔き混ぜるような摩訶不思議なパワーを感じる。今まで見たことない作風に驚き、じっと見ていると谷中独自の世界に引きずり込まれてしまうのだ。棟方志功とは盟友で同時期に活動したにもかかわらず世間にはほとんど顧みられることがなかった

版画家だった。最近、NHKの新日曜美術で取り上げられると話題になり、生まれ故郷の桜井市でも見直され、長谷路でも蔵を改めると彼の作品もあったという具合で展示されていた。



彼の作品の中に塗り込められた戸惑いや不安や人間の危うさが混沌とした世相を生きる現代人の共感を呼ぶのだろうか…。谷中安規は1897年に長谷寺近くで庄屋を務める程の名家に生まれるが、母と6歳で死に別れ、父の仕事の都合で少年時代を朝鮮で過ごし、絵を描くという孤独な喜びを見つけ没頭する。生前の版画活動の評価は恵まれず。内田百閒や佐藤春夫等の作家から愛され援助を受けたが、版画制作に没頭するばかりで本の挿絵で少しの収入を得るばかりで独身のまま極貧の放浪生活を過ごした末に、戦後の東京の焼け跡地に建てた掘立小屋の中で栄養失調のため49歳で静かに独り息を引き取ったそうだ。

蔵には、谷中安規に憧れて現在活躍中の版画家**大野隆司**（14点）の可愛い猫の版画も展示。更に、宮崎駿監督の二男**宮崎敬介**の木版画も2点あった。ある惑星の姿を描いている作品だが小見れば見るほど驚くほど細い部分まで緻密なタッチで描かれ、完結した一つの世界を映し出していた。蔵の中での発見や驚きや感動が一杯の版画鑑賞に、名水で喉を潤し、手足を伸ばして休憩したりとゆっくりしている間に6時半、そろそろ出発せねばと門前に並んで記念写真。



夕食後、「長谷路」の門前で

長谷路：奈良県桜井市初瀬町 857

TEL・FAX 0744-47-7047

大和川源流で出会った源氏ホタルに平家ホタル

夕闇は急に空を覆う。ここでハプニング、下見の時は自動車で何気なく通った道にバスが入らない。おまけに、ホタルの夕べを主催している福岡さんの携帯電話が山中で通じない・・・仕方なくバスを降りて歩くことになったが街灯もないので、何かだか心細い。どうにかならないかと運転手さんをお願いして、何度もハンドルを切り替えて細い道を抜けてバスを進め、途中まで歩いていった一群を拾って会場下の駐車場にバスを止め。そこから更に夜道を歩いて作業場があるところまで上がるとちょうど7時半。子供たちのためにホタルの生態についての紙芝居がはじまっていた。

8時前に菜の花の油を採った後の箒のようなになった枯れ枝を手渡され、畑に向かう。到着した時はすでにまっくらで、あぜ道はふわふわとした感触で、暗闇に目がなれない。やがてホタルの光を発見。長い周期で光りを放ち木の陰を飛び交うのが源氏ホタル。高く飛ぶので箒のような菜の花の枝を振り回してもなかなか捕まらない。次第に酔うほどに深い闇にも目が慣れない。棚田には短い周期で光る平家ホタルが飛び交っている。低く飛ぶので何人かが乾燥させた油菜の枝先にタルをとまらせている。一時間ほどホタルを追っている間に闇にも目も慣れて山や水田の輪郭を確認できると更に多くのホタルが光っている様子が見え出した。まさに古の人はこの闇の中で夜を過ごしていたのかも体験できた。帰る前に暫し枝先で光っていたホタルを振り払い、ホタル狩りは終了。9時になっていた。作業場の前で写真を撮った。



暗い闇夜の道を駐車場まで下りてバスに乗り込んだ。高速道路の先には、無数の夜を照らす電気の灯りが灯っていた。儚いホタルの光がやはりとても愛おしく思えた。大和川の源流でホタルに出会い、桜井の魅力にどっぷりと浸かった初夏の一日には様々な発見があった。

NPO 山野草の会：発起人福岡定晃

TEL・FAX 0744-48-8105

参加者：

一般：池田ハツ子・川村照子・田浦ちづる 千葉富久治・富野美佐子・難波りんご・橋本佐智子・濱澤敏子・丸山賀子・椋木みちこ・西口由美・山下典子

塾生：池崎宗男・大森史子・下野譲・田中俊三・谷福江・浜田真弓・原田彰子・丸山公子・宮本雅彦・宮本麗子・森欣子